

庄屋屋敷・加茂荘

加茂家の庄屋屋敷（加茂荘）は花菖蒲の池の東側に1773年に建てられ、加茂家の人々が16代にわたって住居にしてきました。建物の建築に使われている木材の大半は周辺の山から切り出されたものです。

屋敷の敷地や建物は入念に手入れされてきました。母屋の入口のたたいて固めた土の部分（土間）を上がった畳敷きの空間といった細部は今もあります。ここで、庄屋である加茂氏や加茂氏の行政官に対して農民が年貢を納めることになっていました。この行政空間からは裏手に、観賞用の池や精緻に配置された苔のある伝統的な庭園が見渡せます。母屋の入口のスペースには現在も使っている昔ながらの土製のかまどや、大豆を発酵させた味噌をつくるための陶器の大甕もあります。母屋と庭園の配置によって、母屋の部屋は夏でも涼しく保たれます。

母屋の裏の小さな中庭には、乗客を待機中の駕籠を置いていた大きな平たい石があり、その石のそばには身分の高い訪問客専用だった特別な入口があります。

母屋の裏には、屋外に向けて開く障子を備えた広い部屋があります。もともとは味噌づくりが行われていた場所で、現在は喫茶コーナーに改装されています。ここで苔庭を眺めながら緑茶を味わえます。加茂荘は1年中、来訪者に開放されています。